

## 香港雑感—香港をめぐる考えていること—

花田 麿公

20201203 NEANET 顧問

### 前置き

香港<sup>\*1</sup>問題の専門家でもない私は、半世紀も前の文化大革命時代に3年8ヶ月香港総領事館の調査室勤務をした経験という根拠のない理由から、NEANETの研究会での発表をうかつにもお引きうけしてしまいました。浅はかな性格を悔いております。

香港勤務で私はアジアを体感することになり、このことはその後のアジアサービスの方向を決定したといえます。当時の経験には、日本がアジアで未解決な問題に関連する示唆を含んでいると私は考えています。「他でもない私が経験したこと」を踏まえて、NEANETの一員的視点で、しかも今日の北東アジア問題の枠組みと関連させて、今の香港問題を見てみたいとの私自身の欲望もありました。

香港自体はNEANETとしては関心地域の周辺に存在しているものの、香港のアジアにおける地位に鑑み NEANETの北東アジア情勢判断にとって大事な地域の一つであることは論を待たないでしょう。

まず現在発生している香港問題については、問題を二つに分けて考えた方がいいと思います。それは、中国の領土問題であることと、香港人の人権問題であることの二つです。そしてそのような問題が発生している根源はこれまでの香港自体の国際的地位とその微妙な性格からくるものと思います。

研究会での発表では私の考察のよってくるところを時間の制約上もあり説明をはぶきました。そこで、因果関係を直に記し論考となるようには書かず、在勤当時の生活経験なども紹介しつつ、ゆるりと論じましたので、雑感と題しました。若干の経験に触れておりますので、こういう経験からこのように考えているのであろうとご理解いただけたら幸甚です。

### 雑感 1. 香港関係のニュースとメディア

---

#### \*1 香港の名前の由来

明治4年岩倉具視らが欧米に派遣された記録『米欧回覧実記』の最後、第一百巻に「香港及ヒ上海ノ記」がありますが、「ホンコン」とは海賊を意味するポルトガル語で中国人が香港との漢字を充てたと記しています。しかし別の伝では英国人が初めて香港に来たとき、香港の水上生活者である蠶民に逢ったので、地名をきくと Heung Gong と答え、これを聞いて Hong Kong と記録したからとしています。また別の伝では、香木の産地だったとか、香木の貯蔵所が香港にあり香木を輸入する港だったからとか言われてもいます。事実はいずれか不明です。

最初に問題意識として、次のような考えを披露いたしたく思います。われわれの得ている香港関係ニュースは日本では量が圧倒的に少なく、また、質の面でも、問題があるように思います。

今、日本は中国に経済の相当部分をお世話になっています。財務省貿易統計では対米、対中貿易は 2006 年にほぼ拮抗し、2007 年以降常に中国が米国を凌駕してきております。2019 年には、中国 33 兆 1357 億円 (21.3%)、中国に香港を含めると、37 兆、0261 億円 (23.8%) となります。翻って米国は 23 兆 8947 億円 (15.4%) で、完全に中国が圧倒しています。因みに貿易総額に占めるアジアの貿易総額は 78 兆 7398 億円となり、50.6% となります。経済はアジア、就中、中国にあることをしっかり確認しておいて香港問題を考えて行きましょう。もちろん、中国か米国かではなく中国も米国もであり、どちらにもリスペクトして例を失しないようとの老婆心です。

そこでわが国の現状を見ると、少数の例外を除きほとんどすべてのメディアは中国を仮想敵国のような扱い方をしているように見えてしまいます。香港問題は格好の反中論陣の材料になっています。生計でお世話になっていながら、中国は感じ悪いということと敵対するのはいかがでしょう。

香港関係のニュースは民主運動が中心で、民主主義をはばむ中国批判の立場で対応されているので、日本のメディアは全体的に反中かとの誤解が生じましょう。報道からは注意しないとなかなか中国の意図が見えてきませんので、わかりづらいという点があります。もう少し、中国の意図についても報道していただけたらありがたいです。

真剣に考えようとするとき、日本のメディアだけでは不足で、BBCとか、香港地場のメディアとか、中国紙誌とかを読み比べる必要があるのですが、日本ではこんな芸当は普通は困難です。

陳舜臣さんをご存命でおられ、解説して下さったら良いのにと無い物ねだりをしてしまいます。私は中国を擁護するものではありませんが、物事は両面を見るべきと経験上承知しております。中国はどう考えているのだろうかという論点は無視できません。

## 雑感 2. 香港問題の発端 アヘン戦争と西力東漸

香港問題のきもは、当然ながら 1840-42 年のアヘン戦争でしょう。この事件は中国だけではなく、朝鮮（韓国+北朝鮮）はもちろん、わが国に計り知れない恐ろしさと覚悟をつきつけました。イギリスは中国へアヘンを大量に密輸しました

が、その摘発に奔走したのが林則徐欽差大臣でした。しかしその奮闘もむなしく、1842年の南京条約でイギリスは香港島を割譲させ、永久領土としました。

当時アヘン取引を行っていたボンベイのスコットランド人 **Jardine Matheson**<sup>\*2</sup> が設立した商社は、私が香港に在勤した 1960 年代末から 70 年代初めごろは、香港の陰の帝王と呼ばれるほど香港で強大な権力をふるっていました。いわばアヘン成金です。**Jardine Matheson** の幹部などイギリスの上層階級は香港島のピークと呼ばれる一等地を占めていました。ピークはよく霧がかかるので、統治階級の彼らはまさに文字通り雲の上の存在でした。

イギリスは結局 1856 年アロー号戦争で九龍の割譲を得て、1898 年には新界を 99 年租借することに成功しました。<sup>\*3</sup>

99 とは久々の意で永久という意味があると当時理解されていました。しかし、現代において、99 年という数字がきちっと守られ、1997 年 6 月 30 日で租借が終了し、翌 7 月 1 日返還式が行われました。新界のない香港は水問題ひとつとっても、自立して生存することは不可能ですので、イギリスは香港島、九龍もあわせて返還したわけです。在勤当時水不足の夏があり、植民地当局は必至に中国側と水供給交渉を行っていました。

香港割譲は、西力東漸に対する東アジアのレスポンスの時代に起ったことで、圧倒的な強さをほこった西洋の軍艦外交に対して、東洋の漁村的海岸が無力な抵抗をした時代といえましょう。東アジアは協力して西力東漸にあたる可能性を実

---

## **\*2Jardine Matheson 商会の強大な権力の例**

香港在勤のとき、香港総領事館が空港で宮家の方のお世話をするようになりました。香港空港で乗継をされた際に、総領事をご希望をうかがったら、長生きの野菜と評判の芥藍菜を食して見たいとのことでした。乗継の時間を考慮するとそのような時間はありません。困り果てましたが、同僚の Y 君が **Jardine Matheson** の御曹司と親しいので相談しました。やがて回答があり、「今から空港は閉鎖になりました、どうぞ街にでて食事されてください」との返事をいただきました。一商社とはいえ香港では強大な権力です。

## **\*3 アヘン戦争後の九龍割譲と新界租借**

アヘン戦争による香港割譲から 14 年たって 1856 年に、広東港で、香港籍の英国国旗を掲揚したアロー号を清国官憲が臨検して、中国人 12 名を海賊の容疑で逮捕し、かつ英国国旗を引き下ろした事件が発生しました。イギリス領事の船員の引き渡し要求を両廣総督の葉名琛が受け入れませんでした。他方、清に別件で要求を突きつけていたフランスとも共同することにして、イギリスとフランスは清と戦争しました。その結果 1860 年の北京条約で九龍半島もイギリスに割譲されました。これで香港島、九龍とも英国領となりました。

さらに 42 年後 1898 年 2 月に、ドイツが膠州湾を租借し、ロシアが旅順、大連を租借し、3 月にフランスが広州湾を占領し、福建と雲南・広西それぞれと不割譲条約を締結するという事件がつぎつぎ起こりました。弱体化した中国に群がるハエのような彼らの行動の中で、イギリスもその波にのり、7 月 1 日中国領の深圳川以南、九龍以北を 99 年租借しました。

現できず、産業革命を経た西洋を受け損なう歴史\*4とも言っているかと思えます。

ところでこの時期、中国は西洋の餌食になりましたが、日本はかろうじて免れました。日本が西洋の餌食にならなかったのは、やはり、徳川政権がしっかりした秩序だった社会を築き上げていたこと、支配階級が皆帯刀で、武芸にはげみ、それが彼らを畏れさせていたこと、些細なほころびはあっても全体として外国人を長崎に封じ込めることに成功したことなどが理由だと考えています。

西洋人が武士の帯刀を畏れていたことは生麦事件後のことをあげるまでもなく数々の例がありますが、萩原延壽氏の労作 14 冊にもわたる『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』にも指摘されており、やはりと私は思いました。多分 10 冊目より前でしたが、今回時間との関係で頁を指摘できませんでした。

次々と植民地主義の悪役たちにやられた北東アジアから、まず日本が富国強兵をして、国際舞台に躍り出ましたが、用意周到でもなく、深い思慮に欠け、帝国主義丸出しで表舞台出ていき、まんまと失敗してしまいました。

西洋といっても、主として悪役は英仏、米ロであり、資料 1 にあるとおりです。当時の悪役は 21 世紀の現在、驚くことに同じメンツで、核を大量に保有して、軍艦外交ならぬ核外交と姿形を変えて、相変わらず力をふるっております。150 年前と異なるのは、当時次々とやられた北東アジアから、日本に変わり、中国が国際場裏で現代の主演アメリカと張り合っていることでしょう。私は中国の台頭をこのように長い歴史のスパンで捉えたいと思います。しかし、核がいるのでしょうか、日本国民としては核の保持を思いとどまるよう北東アジアの代表を説得して欲しいと思います。

---

#### \*4 中国、日本の協力による西力東漸に対処する可能性

近代東洋思想史の野原四郎によれば、日清戦争ごろまでは、中国、朝鮮、日本はなんとか協力して西洋の東漸に対処する可能性があったそうです。だとすれば、香港はけして中国だけの問題ではなかったのだと思います。

しかし、日清戦争を経て、日本では清国たのむに足らずとの評価が広がり、日本の心は離れていったようにみえます。しかし、当時から中国およびアジア諸国の提携で自主独立を獲得しようとした考えを、板垣退助、植木枝盛、中江兆民らはもっていたそうです。

ヨーロッパとのつながりを強化する道は、福沢諭吉の脱亜入欧でしょうか。福沢の真意は異なっていたとの説も有力のようですのでメンションしておきたいと思います。日本の心が離れる一方日本にアジア主義の思想が育っていったことも記憶しておく必要があるかと思えます。

では中国はどうかといいますと、中国は日本が 1915 年に二十一カ条をつきつけるまでは何とか日本と協力して西欧に対処できるのではと思っていたようです。1842 年の南京条約と 1858 年の日米通商条約の二つの不平等条約から、進展していった両国の近現代史は、二十一カ条の要求を受けてついに中国が日本頼むに値せずと気がつくわけです。

### 雑感 3. 西洋文化の欠如と広東人の中国文化

初めて香港に着任したとき、香港と言う植民地都市に極めて異質なものを感じました。そこはアジアでもあり、西洋でもありました。赴任命令の前日に突然香港に行けと言われ、20日間で着任しましたので、日本の通常の生活から急激な変化でカルチャーショックを受けました。

街頭にでるとコンクリートの西洋の街に広東の中国人社会がまぎれもなく存在しており、まったく不思議な場所でした。住居となるフラットの候補を紹介され、アマさん（お手伝いさん）も即決でウンさんを雇い、入居しました。ウンさんの当座の生活費を渡すとさっそく自分の布団を買いに行き、ピーク・トラム（香港ケーブル・カー）の中腹の西洋式の街中を、布団を背負ってやっこらさ上がってきたとき、何か戦前の日本を感じてほっとしました。2LDK+アマさんコーナで、小規模な住居ですが、香港ハーバービューが一望できました。

英国は恩恵は施さないが、政治外交以外は広東人の自由にさせてきていますので、彼らは街の生活に不便はないようです。街には、地場の中国系店舗と中国本土の店舗があり、それぞれ棲み分けをしていました。

通貨は1885年にイギリス資本により香港上海銀行が創設され、1935年から香港ドルを発行しています。これが日常使用される地域通貨となっています。公用語は英語ですが、政治は英語と本土の中国語、生活は広東語、観光、商売は日本語と言われていました。

後にケンブリッジ大学の客員研究員をしたことがありますが、往路3週間ほど香港の植民地支配国だった英国ロンドンに滞在しましたし、たびたびロンドンには出てきました。ロンドンで二階建てバスが走る景色をはじめ右ハンドルとかなり随所に香港との類似性を発見したものの、ロンドンと香港の決定的な違いを感じました。

300点以上の作品が展示された「ピカソ展」がロンドンのテイト美術館で開催され、これを見たとき違いを感じたのでした。このような文化企画は香港にはなかったということに気がつきました。私が香港で感じた西洋文化は大きなイギリスの書店ぐらいなものでした。

今香港に各種博物館がありますが、当時香港には図書館も博物館も絵画館もオーケストラも無かったように記憶しています。あったのかも知れませんが、少なくともロンドンにおけるように市民生活に普及し、なじんではいみませんでしたし、どこにあったか記憶にありません。テレビと映画館それにショッピングと外食だけが娯楽文化の中心のように思われました。つまり、イギリスは香港に西洋文化

は与えなかったと考えざるを得ませんでした。収奪のため経済だけに特化した植民都市でした。

もちろん街では音楽レコードを販売していますし、音楽機器の販売も旺盛でした。しかし、チケットを買って生演奏を聴くなどの機会はまったくありませんでした。

ではイギリス人自身は文化はいらぬのかということそうでもない場面にあいました。街のレコード屋さんにはクラシックのレコードはあるにはありましたが、上質のものはほとんど見当たりません。そこで西洋人行きつけのレコード屋さんを紹介していただき、ビルの3階にある店に行きましたら、レコードは全て事務用の観音開きのキャビネットに入っていました。客が商品名を詳細に言わないと買えない仕組みでした。ドイツ人の年配の店長さんがいました。真っ先にショパンの幻想即興曲を買おうとしたら、ドイツ語で正確に発音できるようになったら来なさい、と追い返されました。多分東洋人はヨーロッパ語を発音できないし、音楽の素養もないだろうとして、西洋人のみでの世界を築いていたのであろうと思います。ファンタスティックと何度も発音練習して買いに行くと、今度は演奏者を言えというのでルービンシュタインとやってやっと観音開きのキャビネから一枚のレコードを取り出し売ってくれました。あれこれ選択の権限はありません。商品は四万枚あると言ってました。それでも最初は門前ばらい。つまり、東洋人が生かじりに西洋文化に近づくなというサインを貰ったわけです。

すると香港人が文化のないがさつな人々のように見えてきました。しかし、時間がたつにつれ、その中国文化の奥深さにたじたじとなって行くわけです。茶、酒、食、書、南画、歌舞、古典などなどです。広東人が築きあげた香港の中国人社会には広東を中心とする中国文化がそっくりあります。

私もとても安い中華料理の文化を堪能しました。中国のおじさんたちが朝から飲茶の老舗にたむろしてエンジョイしていました。三度食べても飽きない種類の多さと味の飲茶、点心など、その食事作法、食習慣を含めて忘れがたいものです。

当時の総領事は中国留学なので料理に詳しく、私は代議士など客人へのサービスを仕込まれました。公邸での招待では、私のスープのサーブがだめと行って、箸で鍋のふちをたたき叱責を受けました。時に街の料理店で客人を接待することがあり、店の特徴を勉強しました。しまいには私は店ごとにちがうメニューの書き方をマスターして、料理店が持参するメニューを1-2品修正するまでになりました。厳しいご指導の甲斐があったというものです。総領事は、つれて来たコックさんを島内の料理店に留学させ、とうとう北京ダックができるまでになり、私たちはその味見に呼ばれるのが楽しみでした。

中国語と広東料理の知識は航空路が開設されるまで、通った北京ウランバート

ル間列車 37 時間または 51 時間の旅で役立ちました。3 組のクルーそれぞれと親しくなり、列車厨房に入れてもらえました。そのかわり、車内での夕食の注文とりに有無を言わずつれていかれ、中国語と英語の間の通訳をやらされました。おかげで積んでいる材料を聞いて、注文し特別メニューの料理をつくっていただきました。

#### 雑感 4 ウンさんから学んだこと

ウンさんの料理もなかなかのものでした。ウンさんの実家は広州にあり、あるとき香港の玉子はおいしくない（本当はおいしかった）、私が実家から鳥をつれてきて生ませると言って、かなり苦勞して国境通過証明書を手に入れ、実家に帰りました。番いの鳥を実家からつれてきてマンションの拙宅内で飼い始めました。しばらくして朝食に鶏肉のかゆがでてきたので、朝から鳥とは珍しいという、毎朝早くから啼いてうるさいのでつぶしたとのことでした。ウンさんはフランス料理、中国料理に通暁していて、彼女の料理のようなメニューと味はその後どんなお店でも味わえませんでした。まさにその鳥の味は抜群でしたが、可哀想でなんとも言えませんでした。

ウンさんにやがて厳しい現実が来ました。1 年たったとき、実は広東省から香港に来たとき、半年更新のビザを取得して入境している。香港で住み込みでアマの仕事をして半年後に一度出境してビザを更新する必要がある。前回は広州に帰って再入境したが、今回は最低 1 ヶ月以上の期間を空けねばならず、広州にはそんなに居られない。居れば政治学習があるし、共産党政権の言うことをきかなければならない。伝手をたよってベトナムに行くことになったという。

彼女は離任まぎわに、われわれ夫妻を一日無法地帯九龍城<sup>\*5</sup>を通過して旧空港裏の山上にある 500 羅漢<sup>\*6</sup>参拝に案内しました。金は靴の中に入れるようにいい、ウンさんは親では心許なく感じたのか、自ら私の長男を抱いて、すごい形相をして、昼間も暗い九龍城を小走りで急ぎ通り抜けました。路地の横道の奥にたむろする男たちから鋭い目で見られて、すこし緊張しました。九龍城を抜けてから山を登り、五百羅漢にたどりつきました。でも楽しい小ピクニックでした。

---

#### \*5 香港城

香港城は実はモンゴルが香港を陥落させた元時代の土地で、その後所有関係が不明となり、どこにも所属せず、帳簿からも落ちた無法地帯で、闇組織、麻薬、殺人など物騒なところとして有名です。

#### \*6 羅漢請観音、観音請羅漢

大勢が一人を招待するのは羅漢が観音を招待するといひ、一人が大勢を招待するのは観音が羅漢を招待するということ、ウンさんから教えてもらいました。

その前にウンさんが、2歳の長男に「こら、ヤップンチャイ（日本の子）、良く聞きなさい。戦時中、うちの親戚の人々が歩いていると、日本兵が向こうから来た。日本兵は乱暴狼藉をして怖いので、思わず小さい子供を後ろに隠したら、何をかくしたのかと裏へ回り、その子を銃剣で突いて放り投げたんだよ」といいました。そのような人に子供を任せるのは怖いと思いましたが、でもおびえるとかえってだめだと思い、彼女を信じることにして任せました。

あるとき、西環地区に私は要件があってでかけました。日本人の行かない純広東人地区なので若干緊張しつつ行くと、右の海からウンさんが長男を抱いてサンパンという小舟から上がってくるのに出会い、びっくりしました。夜自宅で問いただしたら用があって九龍側に行ったといいました。サンパンは安いので利用したそうです。このままウンさんに長男を預けていいものかと思いましたが、されとて妻は館員夫人として、公邸の生け花当番とか、いろいろ夫人プログラムがあり、外交は夫妻での総力戦なので、引き続き預けるしかない、信じてみようということになりました。その後の九龍城を抜けての五百羅漢参拝です。私はウンさんを疑ったことを恥じました。

北東アジアで私は以後「信」という一字を指針として来ました。

ウンさんは離港してベトナムに行き、向こうで就職しました。ホウさんという別のアマさんを紹介していきました。最後がセンさんで、この人も心に深くのこる人でした。いずれも家族同様となり、別れは涙涙でした。後に瀋陽でも中国の人の情は濃厚でした。

ウンさんはやがてベトナムから一時帰ってきて、広州の実家に行ってきましたが、ベトナムから私の妻に大きな真紅のアレキサンドリアの宝石をみやげに持ってきて驚きました。このように香港の広東人でも香港には出稼ぎに来ているというような背景があり、香港の賑々しい街頭の繁盛ぶりも浮き草のような人々の血と汗の上に築かれていると承知しました。

## 雑感5 日本の香港占領3年8ヶ月と日本への怒り

1941年12月8日アメリカの真珠湾を日本海軍が攻撃しましたが、私は座敷に設置したラジオで開戦放送を聞きました。父母も庭で紅葉の落ち葉を掃いていた手を休め聞き入り、その意味を教えてくださいました。これから戦争という恐ろしいことが始まると、新聞記者の父としては、隣近所を用心せずに言っているのか、母が畏れたのを記憶しています。太平洋戦争に突入したわけです。香港でも日本陸軍が攻撃を開始して12月13日には九龍をとり、12月25日に唯一の貯水池を奪って勝負が決し、イギリス軍は降伏しました。

香港攻撃の指揮者だった酒井中將が日本による香港政庁を設置しました。翌年になり2月に日本人の香港総督磯谷中將が赴任して軍政を敷きました。磯谷中將はその25年前に広東駐在の歩兵連隊付きでいて、1925年から28年まで再度広東に駐在しているので広東地域は経験がありました。

軍政は脱イギリス化を政策としましたので、イギリスの政策とは真っ向から反するものでした。公用語の英語の使用を禁止し、広東語のほかに日本語の使用を進めました、また英語地名を日本地名に改変しました。私が赴任したころでもある程度日本語を理解する人々がおりました。

香港ドルを軍票に切り替え、大量に発行したためインフレを起こしたりしましたが、戦後再占領した英国は軍票を無価値としました。他方日本政府も補償義務なしでつぶねました。しかし、強制的に財産を軍票に交換させたので、被害者が多く、私が赴任したころ地場の人々は軍票の補償を求めて、総領事館にしばしばデモを仕掛けて来ており、あるときは偽爆弾まがいの箱状のものが玄関先におかれ、政庁の爆発物処理班がでばってきました。軍票の損失補填を求めて日本で民事訴訟が起こされましたが、1999年6月17日に東京地方裁判所は、当時の国際法で戦争被害に対する個人の損害を補償しないという原則と、日本の国内法に軍票を交換する法律が存在しないことを理由に請求を棄却しました。この被害者は多く、日本は香港で潜在的恨みをかかっていたましたが、世代交代と住民交代で次第に自然消滅に向かっているようです。

香港では日本軍占領の不自由を逃れ、70万人もの住民が中国本土に逃れたと言われています。占領軍兵士のよくない態度は、私の勤務時代には香港住民の記憶に、深刻にありました。アジアの仲間を痛めつけてしまったのです。そこはイギリスと異なりました。井上靖さんは、香港ではありませんが、北支と呼ばれた地域での従軍中に日本軍の行状について日記に書いておられます<sup>\*7</sup>。私が聞いた日本軍に関する話よりはマイルドですが、当時の日本軍兵士の行状を知るよすがとなりましょう。

在勤したマレーシアにおいても、あそこの広場の塔の中に400体以上の人骨があり、日本兵にやられたという話を何度か聞きました。

また、同じくマレーシアで近所のお人好しのYさんが日曜に窓から中を覗きこみ、日本に帰るのならつれて行って欲しい、あなたの庭の庭師をしたいというので、日本に私の庭がないと言うと落胆して、実は父は穴を掘らされ、日本兵にその穴に埋められたので日本を恨んでいたが、あなた方家族を観察していると今の

---

#### \*7 井上靖の従軍日記

北支といわれた中国北部での作戦行軍に従軍していた井上靖が、従軍中に手帳へ密かに記録したもの（『中国行軍日記』2016 井上靖文学館）。

日本は別物のようなので行きたくなつたと述べました。

いまでは当時の生き証人のような人の生存もなくなつたとは思いますが、日本人は忘れてはいけないことだと思います。香港では当時日本は彼らの腹の底で信頼されていなかったことも忘れられません。2012年ごろ「香港保釣行動委員会」の船がたびたびわが国の領海に侵入したことも記憶に新しいと思いますが、このことと関連していると私は思っています。

## 雑感6. 香港の住民はなに人ですか? かいま見た香港ナショナリズム

香港の住民の中には、アヘン戦争当時の地元生え抜きの住民の子孫である人々は少ないと在勤していた頃ききました。ほとんどが広東省ほかの地から渡ってきています。香港の当時主要メディアは新聞で、政庁系、地場香港系、台湾系、中国系とありました。中国系の元敏腕記者のSさんと家族ぐるみ付き合っていました。Sさん自身は北方の出身ですごい訛りがありましたが、かえって中国語の勉強としては実践的にできていいかなと進んでおつき合いして、社会のこと、生活のことといろいろ教えていただきました。私が香港から帰国後、頸椎のむち打ち障害で苦しんだとき、人づてにそれを聞いたSさんが、病はどのような状態かと聞いてきて、やがて香港から漢方薬を送ってくれました。香港にはSさんのように広東人でない人も結構いました。このような人が、何らかの事情で本土から香港に逃げてきていて、その話に深入りしないのが香港では礼儀で、それ以外の部分でもやま話に話がはずみました。

1960年代には香港に近い広東省から海上を船できて、香港近くで最後は海に飛び込み泳いで香港島にたどりつき、手引きの人間にかくまわれた亡命者がわりといると聞きました。そのような一人に会ったことがあります。たまに失敗者がいて、香港政庁当局により広東に送還されていました。手引きビジネス者または親族によりうまく一定の期間隠れおおせた者は、香港市役所でレジスターして香港人になりました。広東省から密入境してくる人々には、割のいい仕事ばかりではなくても、何とか仕事はありました。

当時、企業は一日9時間労働で春節以外に休みはないと聞きました。もちろんもっと人権に配慮した職場もあったと思いますが、これが標準だったようです。そのような企業の経営者から大物がでてきていました。彼らの子弟が通う香港の諸大学はかなり優秀で、卒業者が香港政庁の官僚層をはじめとして各界のリーダーになっていきました\*8。

---

\*8 世界大学ランキング 2017-18

イギリスの大学評価機関が選定した世界大学ランキング 2017-18 年版より

最近、香港人は香港独自の別人種であり、本土の人間とはちがうという香港人がいて、とくに若い世代にそういう人が多くいるようです<sup>\*9</sup>。昨 2019 年 6 月の「逃亡犯条例」の改革案に反対する爆発的なデモで、植民都市国家からはじまり、「ポリス香港」としての性格をいやでも造り上げざるを得なかったようです。香港に対する帰属感が高まり、香港はアイデンティティを持ち始めたように思います。

香港が 1997 年に特別行政府としてイギリスから中国国籍に復帰して以後、当然ながら本土から多数の観光客がなだれこみ、日本での彼らの行動以上に行儀が悪いようで、垢抜けた香港人にとってはたまらない思いなのだそうです。これが反本土の気分を加速していないかと思われまます。香港人が心で思い描く「ポリス(都市国家)香港」への帰属意識を生成しているように見えます。香港訪問者の言や、報道を通じてみると、若者中心に従来ない愛香港感情があるように思われまます。一方で若い香港人も本土側に気楽に観光に行ったりショッピングに行ったりする往来が増加しました。香港人の旧世代には気に染まない行為に見えたとの噂も聞きました。

つまり、現在の香港人には、他のどの地域の中国人とも異なる「香港人」という帰属意識が育ってきているようで、それが、昨年来特にたかまった民主運動の波となったように思えます。

民主運動で人気の周庭さんに似た B さんと言う若い女性が私の香港在勤当時家族の友人でした。私どもの帰国後、恋人と来日して、せまい公務員住宅に泊まってくれたことがあります。かれらの時代には香港人は別人種だとのコンセプトは皆無でした。B さんカップルに日本に移住する可能性について相談されましたが、日本は受け入れないだろうと説明しました。香港に将来とも居住するか、台湾に行くか、それとも北米に行くかに悩んでいました。

しかし、今の香港ナショナリズムは、米国を始めとする諸外国の支援を得て、「香港」自治、あわよくば独立との指向性を有するようになったと中国本土側には見えるのではないのでしょうか。さすれば、領土問題となります。植民地奪還の途中で独立されたら困るので、中国としてはあらゆる手段を尽くし阻止することは目に見えておりました。それが、6 月以来の中国本土の動きと思われまます。

ただ私の在勤した当時でも香港ナショナリズムを感じた場面がありました。事

---

アジアでトップをいくシンガポール(南洋理工大学が 11 位、シンガポール国立大学 15 位)は別として、香港と日本を比較すると、26 位 香港大学(アジア 4 位)、28 位 東京大学(アジア 5 位)、30 位 香港科技大学、36 位 京都大学、46 位 香港中文大学、49 位 香港城市大学、56 位 東京工業大学 と日本より香港が優位な状況です。

\*9

務所はビルの 19-20 階にありましたが、1 階の出口にキオスクがあり、買物をしたとき、広東語がまだできなくて、英語で注文すると、「広東人がなぜ英語なんか使うのか」とあからさまに非難され、日本人ということで納得してもらいました。他の日本人職員とことなり極端に痩せていたので餌食となったようです。もう一度はブランケットを買いにデパートに行ったとき、赴任早々なので家族分三枚注文すると、映画スターかというので違うというと、香港人がなんでこんなに毛布を買えるのか、なにか旨いことしているのかといわれました。日本から来たばかりで家族分買って住もうとしていると説明して了解してもらいました。多少のナショナリズムが腹の中にあると感じました。

香港には 3 種類の人々がいたと理解しています。まず絶対統治者の英国支配者、次にビジネスでの成功者、そして三番目は圧倒的多数の広東人です。彼らの多くは本土からでてきています。本土とつながりのない生粋の香港人は少ないと思います。香港各界の指導的立場の人々は私は本土の広東省だとか、湖南省だとか浙江省だとか上海だとか、本土におけるオリジンを言います。そしてそれに合わせたように中華料理屋があります。上海料理、北京料理、四川料理、浙江料理、そしてもちろん広東料理が圧倒しています。料理店の多さで現在香港にいるその出身者の多さが分かれると私は思いました。この人たちが香港を形成しているといえましょう。ただし、現在においてはプラス外国企業の外国人従業員も香港に欠かすことのできない有力な人々となっていることはご存じのとおりです。

ですから、昨年以降の中国の対応を見ていると、香港人の最近の独立的自覚傾向に、しかも、米国はじめ自由圏諸国がそれを促進する方向で応援しはじめたのに中国、特に習近平主席が堪忍袋の緒を切ったと言えましょう。

どんなに香港住民が騒いでも、どんなに米国が国内法で中国を糾弾しても、最終的には領土問題である以上、中国は絶対に死守するものと思われまます。アメリカは中国とともに覇を競っていますので、中国が弱体化するアキレス腱になればいいと、人道問題で香港をあおる政策に出ることは火を見るより明らかですが、中国にとって、日本や韓国にこの問題で非難されるのはつらいと思われまます。

## 雑感 7. 香港人はいつも不安、現地で我慢か外国へ移民

香港がイギリスの植民地であった頃、将来香港がどうなるか不安がつきまといまました。

1980 年代になり、中国の文革が収束して、鄧小平政権とサッチャー政権との間に香港返還交渉が進められ、1984 年 12 月 19 日の中英共同声明で 1997 年をもって香港の主権を中国に返還する約束が成立しました。一国二制度、資本主義制度

は 50 年間維持することになりました。それは 1997 年 7 月 1 日施行の「中華人民共和国香港特別行政区基本法」第 5 条にも、「香港特別行政区は社会主義制度と政策を実行せず、もともとある資本主義制度と生活方法を保持し、50 年変更しない」と記載されました。

1997 年やっと中国という母国に香港が帰ってきました。全中国人にとってこれは慶事であるはずですが、でも香港人はすでに中国本土の中国人とは異質に育ってしまいました。社会主義中国はなじめません。そして、今なお、香港人はいつも不安と隣り合わせに生きているようです。

私の時代は、香港がいつ中国に押さえられるかが不安の中の最大のものでした。今は 2047 年 7 月 1 日には香港は中国に完全合併されていることが明確です。民主主義と自由を若干でも享受した香港人はそれまでに、中国の直接統治のもとに暮らすか、外国に移住するか決意しなくてはなりません。今度は期限がはっきりしており、それまでに本土が中国共産党の支配から脱出している見込みは今のところありません。これからも期限付きの不安の中に生活して、若者はそこで家族をつくり暫時落ち着くか、カナダその他英語圏に亡命するか思案すると思います。

外国は、台湾に行くことを考える者もいるかと思いますが、カナダの方が多いのです。出張でバンクーバーに立ち寄った際、無人鉄道に乗る機会がありました。学校の下校時間と重なり車内は学生であふれていました。しかし、ほとんどが広東語でした。街にも中華料理店が多くあり、若いころ本場香港で食べた料理と何ら遜色ありません。聞くとホンクーバーと呼ばれるほど、香港人が移民してきているようでした。

ではなぜ台湾が少ないかと言えば、台湾は福建省の人々がおおく現地語はホッケンと呼ばれる福建語で、言葉も、食事も広東とは流儀がすべてちがいます。ひとことで言えば料理が口に合わず、言葉が分からないからです。その点香港人はその他の地域のアジア人よりは英語ができます。カナダにコロニーを作ればそこは広東語です。ですから、台湾よりむしろカナダとなるわけです。

しかし、本年 6 月 30 日に成立した「中華人民共和国香港特別行政区国家安全維持法」により、中央人民政府の国家安全維持公署が設置されることになりましたので、おいそれとは外国にいけない状況に変化しました。今後は香港人は本土並みかそれ以下の渡航の自由を享受することになると思われます。民主運動家はいやでも外国に亡命せざるを得ず、そのたの大多数は本土になじんでいくしか道はないのでしょう。

## 雑感 8 一国二制度と中国の対応

この問題を私は二つの面からアプローチしております。ひとつは法的、政治的側面、もう一つは心理的側面です。言い換えると領土問題と人権問題です。

### (1) 法的、政治的側面 領土問題

第一に植民地香港をイギリスにより割譲させられたこと及び租借を認めさせられたのを奪還する問題です。植民地として割譲した領土を回復をするという領土問題です。

仮定として、日本の北方領土問題と比較してみましょう。

中国が日本、香港が北方領土、ロシアがイギリスと置き換えた場合、イギリスは潔く返還したと思えます。ロシアは当分返還しないでしょう。もっとも 99 年ぶりですが。

北方領土が返還されれば住民は喜ぶでしょう。香港では必ずしも中国に帰順したがっておらず、あわよくば独立、すくなくとも自治（港人治港）したがついています。択捉・国後・歯舞色丹国を作りたいというようなものです。北方領土に居住できる日本人住民がいたとして、彼らが、帰属を嫌がって、デモしたり、外国に亡命したりすることは考えられません。それは何故か。政治的に日本は自由圏ですが、中国は社会主義国だからではないでしょうか。つまり、今の香港の民主派住民は社会主義の中国がいやだと言っているのだと思います。

ではいつ香港住民は中国に帰属するのでしょうか。中国が社会主義を止めたとき、あるいは共産党の一党独裁がなくなったときを待ちたいのでしょうか。でも、そのような社会をだれが作ってくれるのでしょうか。中国国民が作るしかないのではないのでしょうか。そして香港は 1997 年に返還されて、中国の特別行政区になりましたので、住民はまぎれもなく中国国民です。

香港の人々は自国の改革を果たして目指すのでしょうか、また目指せるのでしょうか。それとも不戦敗で外国に逃げるのでしょうか。そこには自由な社会があるからでしょう。でも、逃亡先の国の自由な社会は誰がつくったのでしょうか。その国の国民ではないのでしょうか。だとしたら、せつかく彼らが築きあげた自由の国の一角に大挙しておしかけ、彼らの成果を何の貢献もなしに享受するのでしょうか。考えるとちょっと厚かましいように思います。祖国の山野が荒れていると思うなら、自ら畑を耕し、果実を収穫するようにすべきなのではないかと思えますがいかがでしょう。なお、誤解のないように申し上げれば、私は香港人による革命を示唆してはおりません。好むと好まざるにかかわらず香港の人々は普通の中国人にならざるを得ず、そこから、一国民として考えて行かざるを得ないのだらうと思います。

そして、われわれ、自由諸国の国民が香港に対する対し方はいろいろあると思いますが、このことはまた別の大事な問題で、自由と民主主義を守りたいとする崇高な香港市民の心と活動は、大事にしなければならないと思います。

しかし、残念ながら香港に立てこもり、外国の支援を得て独立という道だけはないと思います。なぜなら、領土問題になりますので、中国は総力戦でくると思います。今の中国軍の戦力はかつてとちがい、そうたやすく倒すことはできないと思います。アメリカは、香港のためにそのようなことはしないとします。

## (2) 心理的側面

イギリスは香港を収奪してきましたが、近年になって香港住民のための施策をとるようになりました。いわゆる積極的不介入です。私の在勤中にトレンチ総督から1971年マクレホース総督に代わりましたが、彼は10年半も総督をやり、住民福祉に手をつけました。義務教育の導入、公営住宅建設、郊外開発、地下鉄建設に着手するなどをしました。そして最後のパッテン総督の時代、大幅に政治の民主化を進めました。1994年立法会議員の選挙法を改正し、職務選挙区の提議を拡大して、事実上すべての有権者が直接選挙できるようにしました。中国は彼を「千古罪人」と称して反発しました。たった3年ですが、香港人が民主主義の恩恵を体感いたしました。しかし、1997年香港返還後臨時立法会に置き換えられ、民主主義の観点から見て、後戻りしてしまいました。

ただし、植民地を去るとき紛争の種を残すという伝統的戦略があり、米占領軍が日本に北方領土の紛争の種を残したのと同じであるかもしれません。さわさりながら、香港人が民主主義の恩恵をささやかながら体感したことは、香港住民の将来にとり良かったのではないかと思いたいと思います。自由のすばらしさを垣間見た香港の人々がささやかな抵抗をして、本心を伝え続けているのが所謂民主運動と理解しています。ただ、これは香港のような微妙な土地に居住する香港人の心理的な側面の表現であっても、法的にはどうすることもできないのではないのでしょうか。

他方で、中国は香港の祖国復帰にあたり、現実の香港事情を踏まえ軟着陸を試みたといえましょう。すなわち、一国二制度です。現地の香港中国人にはソフトでありましたが、祖国復帰を遅らせ困難にしたと言えなくもありません。それが英国の条件だったので中国も飲んだのでしょう。よほどのことがない限り、香港は現状のまま進展していき、2047年に中国に法的に約束された吸収をされることになるでしょう。

2014年の雨傘運動を彷彿とする激しい民主運動が昨年来発生しました。2019

年からの展開は香港の運命を左右しました \*<sup>10</sup>。2020 年に制定された国家安全法が今度は邪魔をして外国異動はほぼ不可能になりました。いわゆる民主運動は、リーダーたちが亡命したり、逮捕されたりして、ある一山を越え、かつての運動のうねりの再現に至るには、その環境は厳しくなってきました。

私の観測では香港は 2047 年まで現状で推移していくものと思われまふ。本土中国が中国特有の社会主義を主張して一党独裁をしており、その体制が香港人の祖国への帰属意識に抵抗感を高めているといえまふ。一党独裁の最重要な要は党政府批判を許さないことで、かつての日本の国体護持と非常によく似ています。香港人はこのような中国とはそりが合わないと思ひますが、香港内部からその合う人たち、商売上そりを合わせる人たちがでてきて、徐々に慣れていくのだらうと見られます。香港ではその時の政治事件が香港の人口にもろに影響してきまふましたが、2047 年前に香港はまた人口減少があるかも知れまふ。しかし、特別との冠がつくとはいへ、中国の行政区画の一部になつた今、彼らに本土並みの法律が施行され、従来のように自由な出境はできなひと思ひます。50 年間の一国二制度の本質が習近平政権により、中身がより厳しい展開になつたことは否めまふ。早晩香港人は中国国民としての自覚をもつ覚悟をせまられるものと思ひます。

---

\*10 2019 年以降の民主運動の流れは次のとおりです。

4 月 香港立法会「逃亡犯条例」改正案の審議を開始。

6 月 講義デモが拡大、最大 200 万人（主催者発表）。

9 月 林鄭月娥行政長官が条例改正案撤回を表明。

10 月 中国共産党中央委員会「国家安全を守る法と執行制度の確立」決定。

2020 年には引き続き次の展開となりました。民主派は窮地に陥っています。

5 月 全国人民代表大会 国家安全法制の導入に関する決定を採択。

6 月 30 日「中華人民共和国香港特別行政区維護国家安全法」第 13 期全国人民代表大会常務委員会会議で採択。（同法により中央人民政府駐香港特別区国家安全維持機構がおかれ、国家安全維持公署が香港に設置されることになりました。これにより香港民主派への妥協を許さない取り締まりが強化されました。） 7 月 30 日香港政府、9 月実施予定のの立法会選挙の民主から立候補予定の 12 人の立候補を禁止しました。 内 4 名は現職。

31 日香港政府は立法会の選挙をコロナを理由に 1 年延期しました。 ↑

8 月 1 日香港警察は香港紙創業者、黎智英（ジミー・ライ）「リンゴ日報」（政府批判的）らを国案法違反容疑で逮捕。

9 月 1 日林鄭行政長官「香港に三権分立はない」と言明。イギリス返還後の「港人治港」終了の始まり。

11 月 1 日香港警察、民主派の現職、元職議員 7 名逮捕。

11 日民主派議員の資格取消し→議会親中派一色に。

23 日民主活動家 3 人を収監、起訴され、1 2 月に入り刑が確定。

2047年には香港は本土並みの都市となり、諸都市のなかの一つとして自らの特異点を求めて行かなければならないと思います。HUAWEI（華為）などの技術革新が、銀行や紙幣を減ぼすかも知れませんが、香港が引き続き金融の中心であり続けることを許されるのか確信をもてないところです。（了）